

# 國文學と註釋

島津久基

在來の國文學研究が久しく訓詁註釋に終始してゐたことは事實である。特に古典に對して漸くその解明の必要が感ぜられて來た平安朝の末頃から唯因襲に引きずられ無意義な傳統熱に酔ひ來つた近古時代に至つては一層、幾多相繼いで試みられた古典の註釋は、徒に屋上屋の煩雜と冗漫と無意味さに耐へ得られさへすれば、最後に出た一本をとればそれ以前の註釋の史的縮圖を極めて便利に概觀し得るほど先人の考に對する旨目的な尊重の跡を殘してゐるのである。而もなほそれは眞の意味の訓詁註釋とは言へないものであつた、徳川の文藝復興期以後に於ける復古精神の活動に伴ふ眞摯な古典研究の第一歩として訓詁註釋が始めて文獻學の一方面として所謂國學史の上に意義ある仕事を遂行したのであるといつてよい。

然るに國學の成立といふ喜ぶべき現象は又やがて破壊を生命としてゐた保守的な傳統の芽をいつか自

身の中にめぐまされてしまった。國學創設當初の先覺者達の意氣も抱負も不斷の努力も漸く見られなくなつて、徒に邪路に入つた小さな鎖國的同時に殆ど世襲的訓話學の世界にせぐまつてゐる一團の人々の手に國文學が委ねられることになつた爲に、そして今ではもう殆どそれは影の薄いものになつてしまつてゐるにかゝはらず、その餘波はなほ一部の人々に國文學研究を註釋といふ側に局限せしめて考へさせ、同時に他の方面に於てやゝもすれば國文學そのものに對しての大膽な無鑑賞無批判的な侮蔑をまで惹起せんとするのである。

## 二

我々は世界中で日本だけが國文學を訓話の學にいつまでも委ねて顧みないといふやうな非難に對して、無條件に事實上の承認を與へる必要を感じないが、しかし十分に反省して自らを責めたいと思ふ、同時に國文學の研究に従事してゐない立場を羨ましくも思ふのである。註釋などは現代の仕事でないといふ聲も聞く。全くさうだ、さうでなければならぬと言ひたい。しかしその爲に所謂訓話註釋は果して完全になし盡されてあるだらうか。

訓話の學に國文學を委ねて顧みなかつたのは過去の事に屬する。しかしながら藝術作品としての國文學に對して試みられた批評もまだ數多くなく、新しい意味の文獻學従つてそれに屬する諸種の分科の對象としても國文學はなほ其の一部分しか取扱はれてゐないのである。そして此の不満足な狀況を餘儀な

くせしめられる主な理由が研究の成果に到達する準備並に手續の上に存するといふことがいつも我々をして痛恨を禁じ得させないところである。對象たる作品を正しく理解し鑑賞し得るに必要にして十分な資料の蒐集すらも決して完全に試みられてあるとは言へないのである。語源辭書や國文學の或作品に就いての特殊辭書、先人の研究に關する記録の史的若しくは種目的集積並に類別などのやうな大切な作業が未だに殆ど爲されてない爲に、研究の緒をすらかみ出すに困惑し、或は暗中摸索的な材料蒐集の迷路に彷徨し、満足であり完全であると信ずる理解に達し得ざる焦燥は、やがて逡巡となり倦怠となり自棄となるに至ることすらあるのは常に經驗するところである。而して更に從來國文學者の主要事業であつた註釋の方面に就いて觀る時、なほ少からざる不安が生じ來るのである。

### 三

我々は訓詁の蔑視といふ意味のない英雄的な態度の愚かさを議するに堪へない。我々はその一生を此のじみな作業の爲に捧げた數多の國學者達にいつも深い尊敬を致してゐる。今日我々の研究に如何ばかり多くの恩恵を與へてくれるかを思ふ毎に感謝の念を禁じ得ぬのである。實際彼等の時代は當にそれがなされねばならなかつた時代なのである。さうでなければそれは更に次の時代の人々に殘されねばならぬ負擔であつたからである。唯我々は彼等の据ゑかけてくれた土臺石をもつとしつかりしたものにしつゝ、その上に諸種の研究を築き上げて行くことに努力せねばならぬことを感ずるのである。

私は今此處に「彼等の据ゑかけてくれた土臺石をもつとしつかりしたものにしつゝ」と言つた。まこ

とに我々の先人の訓話學は如何にも眞摯であり篤實であり歸納的方法に立脚して親切な解明を試みたものではあるが、その最も不満足な點は、對象たる作品を——二の除外例の他、多くは——文獻學の見地からのみ眺めて、國文學として取扱はなかつた點にある。その對象が、藝術乃至藝術的の物であるといふことのはつきりした意識がやゝもすれば忘れがちであり、或は全然認められないものすらあるといふ點である。即ちロダンの所謂「見」ることをしなかつたのである。「眺」めてばかりゐたのである。つまりは國學としての訓話註釋であつた。従つて言語學的、文法的方面が主になつてゐた。更に言はゞ單語本位、乃至は文章本位のものであつたと言つてもよい位である。そして又此の意味の訓話すらも國文學全體に互つて決して十分に信頼すべき程度の成功を收めてゐると斷言することにも躊躇せねばならぬ有様である。此の訓話註釋——あれほど多大な努力が拂はれたにもかゝらず——の不備といふことが即ち古文學の眞の内容的解明といふものが未だ完成せられてゐないといふことが、一般の人々にとつて、古文學をほんとうに理解する上に、従つて之に對する文獻學的なり審美的なりの批評を施す上に、如何ばかり不安を感じ障礙を與へ來つたであらうか。

そこで所謂訓話註釋を覆すのではなくて、其の不備を補ふことも、今日の我々に殘された仕事の一面でなければならぬ。否眞の意味の註釋は未だ爲されてゐないのである。近代文學は勿論、古代文學と雖も、新なる註釋を施すべき必要をその作品の研究を自身爲に明らかに感せしめられるのである。

## 四

國文學の中で古來無數の愛讀者を有し、隨つて數へきれないほどの註釋書を生み來つた徒然草、しかも現時なほ高等程度諸學校受験參考書といふ妙な役目を、いつのまにか引受けさせられてしまつた——兼好も迷惑であらうが、受験生には一層迷惑であらう——爲に、兎も角も最も廣く讀まれてゐる筈の、同時に益々續々として其の註釋書の殖えてゆく徒然草、これならばもう十分に解明し盡されてゐるだらうと思つて數ある註釋書を手にしてゆくと、割合に無造作に片附けてしまつてあつたり、回り道をした面倒な手數がとつてあつたりして、まことに物足りない解釋が意外に多いのに驚かされるのである。先づ何人の耳目にも熟してゐる有名な巻頭の一節、そのまた冒頭の「つれづれなるまゝに」からして既に我々はもう一度新に考へ直してみる必要はないだらうか。

## 五

「つれづれ」の解釋は新舊とりぐであるやうであるが、先づ之を「徒然」であるとして、其の「徒然」の原義は(1)何事も無き義で、出典は史記の春申君傳であるとか、(2)居然と同じで動かざる貌であるなどいふ説明がある。是は漢字に宛て、解かうとする人々の態度である。伊勢物語の眞名本に「徒然」の字が用ゐてあるところから來てゐる。

源氏物語須磨の卷に「つれづれなるまゝに」とあり、幻の卷にも、伊勢物語にも、枕草紙にもある語

であるとして、そこから語義の説明に入らうとする人々がある。是は古文學に其の典據を求めようとする行き方で、往々古文學で以て悉く後世文學を説明し得るといふ時代錯誤的な謬見の伴ふ危険な方法である。

更に「徒」は非教訓の意だとか、佛敎の「空」の意だとか、だんく、駁路に入つた解釋も出て來、「法師にあるまじき逸興の遁辞」と此の序段を看るのも大体此の非教訓の解と同じ系統の考へ方のやうに思はれるが、近來の數多くの小註釋書には大抵一樣に「退屈」と簡單に言つてしまつてあるやうに見受けらる。文段抄を増補して「本文にはくしくしく註したれど、俗にタイクツといふことなり」と註した鈴木弘恭氏など以來のことであるやうに思ふ。

序に稍餘興に類するが、噴飯に値するのは「どころどころ」の母韻變化説である。「まごろむ」「どころける」「どころかす」などの語根「どころ」の重なつたものが、轉じて「つれづれ」になつたので、「つれづれは「どころく」に即ち意識の朦朧たる状態を意味する、だから「あやしうこそ物ぐるほしけれ」なのであるといふ落語式な説明に對しての論難は茲に言を費す要を認めない。まだしも故高木兼寛博士の「心」の「ころころ」演説のフホルクスエチモロギが心學道話的の興味の添ふだけ一寸尤もらしく聞える。

## 六

「つれづれ」といふ語の語源を調べることは無用の事ではない、それが内包的意義の時代的變移を考

察することも大切な事である、しかし兼好の「つれづれ」は必竟兼好の「つれづれ」である。古典や漢文のそれと全く同じである必要はない。作者自身の説明に聽くのが一番いゝ方法ではあるまいか。幸にして彼の思想生活の内部に立ち入つて是が説明を演繹し察する手致をとらなくとも、彼自ら自分の言葉で明らかな解説をしてくれてゐるではないか。

つれづれわぶる人はいかなる心ならむ。まぎるゝ方なくたゞ一人あるのみこそよけれ（徒然草七十五段）

若し「つれづれ」が「退屈」だとすれば、それを兼好に好ませておく註釋者達は少々惡戯が過ぎよう。兎も角「つれづれ」は徒然でも居然でも何でもあれ、兼好の「つれづれ」は「まぎるゝ方なくたゞ一人ある」状態である。心を捕へらるべき外部生活の世界から暫く全く解放されて、一人靜に自分を見つめることの許された時間ではなからうか。古いが野槌の「閑寂のこゝろなるべし」文段抄の「さびしきなり」といふ註が少し意味が違ふけれども「退屈」などにくらべてむしろ勝つてゐると思ふ。但し源氏などに「寂しく徒然げ」「いとさうづしく徒然なる感めに」（橋姫卷）などあるのを以てみると、「さびしと全くの同義語ではないと思はれる。

源氏物語幻の卷に女三の宮の事を叙して

何ばかり深う思しとれる御道心にもあらざりしかど、この世に怨めしく御心亂るゝ事もおはせず、

のどやかなるまゝに、紛れなく行ひて（下略）

とある。竹川の巻にも「大方のどやかに紛るゝことなき御有様ごもの」「三月になりて咲く櫻あれば散りかひくもり、大方の盛なる頃、のどやかにおはする所は紛るゝことなく」など見えてゐる。「紛るゝ方なくたゞ一人ある」状態が平靜で幸福な意識に満ちてゐるときが「のどやか」で、精神活動がその中心となすべき対象を獲ずは何處かに満たされぬ孤獨の感に支配せられるときが「つれづれ」ではなからうか。（此の二つの心持を同時に味ふことも出来る。「女御なむ徒然にのどかになりたる有様も」とやはり竹川の巻にある。なほ以上の引用又は兼好の「つれづれ」を解釋する上の參考として、源氏で「つれづれ」を説明するつもりでないことは勿論である。

## 七

兼好はかく「つれづれ」を好むと共に、一面又此の「つれづれ」の氣持に堪へ得ないところも無論ある。十七段（「山寺にかきこもりて云々」）などは一段的な經驗を教訓的な標語の形であらはしたものであらうが、なほ十二段（「おなじ心ならん人と云々」）百七十五段の後半（「つれづれなる日、思ひの外に友の入り來て云々」）などと共に此の心持を語るものである。此のつれづれであることに却つて一層の寂寞を感じて此の瞬間から脱れようとする心持がはげしくありながら、やはり又つれづれでありたくてたまらない彼の心持は十分に同感の出来るものであると思ふ。かう解して始めて巻頭の一節が

やゝわかつて来るやうな氣がするのである、「つれづれなるまゝに」と「つれづれなれば」とも勿論意味が非常に違ふ筈である。退屈を消す爲に筆を執つて日ぐらし書きちらす奇蹟的なのんきさ、むしろ苦痛でもあるべき大事業を彙好に敢へてさせて、文學は退屈からも生れるものであるといふ新しい事實を教へられ又教へてゐた自分等こそ、ほんとうに「あやうこそものぐるほしい」ものではなかつたか。「涙なき道德書」と嘲笑し去る外人に對する不注意な國文學の案内者の一人であることを愧ぢないわけにゆかないのである。

勿論私は徒然草に絶對の賛辭を茲で與へようとするのではない。その思想の中にはなほ議すべきものが少くないであらうし、全體に輕い「あそび」の氣分が嚴肅な氣分と錯綜して流れてゐることも認める。此處ではその最も有名な隨筆であるが故に、材料として借りて来るに都合がよいと思つたまでのことである。

## 八

上に述べたやうな解釋は、其の場合場合に於ける單語の辭書の註解では出來得ない。作品全體を知らねば試み得ない方法であるが、しかし又作品がよく理解せられる爲には、やはり正しい解釋が必要である、言ひ換へればある作品に對して理解と釋義とは相關的位置に立つものである。結局完全なる理解は即ち完全なる解釋であり、完全なる解釋は又やがて完全なる理解でなければならぬ筈である。此の意味に

於て私は國文學の作品研究に相伴つて或は其の準備として、作品の註釋（むしろ評釋といふやうな意味の）といふことの決して忽にしてはならないといふことを切言したいと思ふのである。たとそれが爲に又國文學研究がいつまでも此の註釋にのみ止まつてゐなければならぬとは考へられない。そして又さうでなかるべきことを熱望するものである。

座 塚 物 語

源義滿公十歳の程にて御世をしるしめされて

四十餘年が間天下をたもち給ふ

（卷二）